

# 自家中毒症

齋藤文雄

ふつう自家中毒といっているが、一体どんな病気なのか。先づ、ごくありふれた解説を試みることにしよう。

この病気は、ふつう突然に初まることが多く、尤も一日二日前から、元気がなかつたり不機嫌だつたりすることがあるが、この時期に、病気が起りそうだと気がつくのは、母親くらいのものである。そのことは、あとで書くつもりである。始まると、あくびを頻りにする。本当に無力性になり、ぐつたりしてしまう。打ちのめされた感じといつていゝくらいぐつたりしてしまう。意識は明瞭であるがいかにも眠い。そして嘔気と嘔吐で起される一寸したことで吐く。食物は始めの中は多少出るが、あとは胆汁や粘液ばかり吐く。ひどくなると茶褐色になつたり血液を吐く。も

つとひどくなると、血ばかり吐くこともある切りに「お水お水」を訴える。こんな時、お腹は、時にごろごろいうこともあるが、お腹の皮が、とても軟い。お臍のあたりを抑えると脈が手指にふれてくる。これでいて、熱は出ない。出る場合は、身体の水気がすつかり涸れた時と思つてよい。下痢はあまり見られない。むしろ便秘する場合が多い。

いかにも症状が悪いので、心配であるが、たいてい三日ぐらいで落つてしまう。どんなに長くても一週間くらいのものである。

先づ大体こんな症状の病気であるが、この病気の一般的なことも、こゝで述べておく必要があろう。この病気は二才ごろから始めて七八才までの子供に見られる。十才以後になると殆んど見られない。この年頃の子供は誰

でも起す可能性があるかというところ、そうでもない。起す子と起さない子がある。起す子は一度起すと、繰返しておとしってくる。ひどい時は気候の変わり目などに、年に五六回も繰返して、両親を心配させる子もいる。

まことに厄介な病気のようなものであるが、一体何が原因で、こんな病気になるのか、これは当然起つてくる問題である。

この病気の原因は細菌ではない。消化器系のいわゆる食当りでもない。原因は、むしろ子供の身体の中に潜む。というのは、この病気は、子供の自律神経の異常、つまり交感神経と副交感神経の緊張のバランスが破れた時にくる病気である。その結果、肝臓の働きが悪くなり、炭水化物の代謝がうまく行かなくなるのだと考えられている。ある時、重症な自家中毒症で、ほとんど血液を吐いて、とうとう死んでしまつた子供があつた。両親の希望もあつて解剖してみたところ、十二指腸の上の方、つまり胃のすぐ先のところ、昔あつた五銭の白銅貨くらいの大きな、おできがあり、粘膜がえぐれて、そこから出血してゐたことが判つたことがある。どうしてそんな大きなおできができたのか。それは、やはり自律神経の働き方の異常で説明することができるのであるが、ひどいときは、こんな例も

あるというわけである。

直接の原因は、こういうわけであるが、そういう神経のガスハーモニーを起す間接の原因もある。むしろ読者には、その方が大切なこと、思う。間接の原因としては、簡単なこと、過度の疲労、発病前にかく食欲がありすぎた、精神的な束縛やショック、こういうことが誘いになってくることが多い。季節から考えると晩春から初秋の候に多いが、冬でもないわけではない。冬おこすような子は多いが多い。

大体この病気は神経と関係がある病気であるが、家の中の環境が大いに物を言う。先程年に五六回も起して、両親を心配させると書いたが、そうすると、子供だけが悪いように聞える。しかし、こゝで最少じほりさげでゆくと、両親が存外、発病の誘因をなしていることが多い。自家中毒症は主として都會病であり、インテリ病だといわれる。田舎には、あまり見られない。自家中毒症をおこす子供は、とかく神経過敏であるが、実はその親もそうである。神経質でなくても、子供が二三回くりかえして突然血を吐いたり、ぐつたりしてしまつたりしたら、大抵の親は神経質にならざるを得ない。病気が治つても、今度は

警戒する。それ遊び過ぎだ、それこの食物はあぶないと、いちいち干渉が始りやすい。こうして親が干渉すればするほど、子供の方は発病しやすくなる。去年の夏は自家中毒症を二度もやつたから、今年の夏は気をつけようというようなことから、到れり尽せりの注意が徹底し始めると、子供は皮肉にも自家中毒症をやる。甚しい時は、母親が、「何だか今日は坊やの顔つきが変だよ、また自家中毒症やないの」というようなことを、うつかり口走ると、それが立派な誘因になつて本当に自家中毒症にかゝるような子もいる。こうして親は慙と焦り、子供は、ひとつひとつ親の顔色を伺うようになり、万事が狭いトンネルの中を通つてゆくような消極性を帯びる。

勢い話は、治療或いは予防という点に落つくことになる。治療は医師のやることであるから述べることは差控える。こゝでは病中の看護が問題であらう。

病氣中最も大切なことは、周囲があまり騒ぎたてないようにすることである。医師との問答も別室でする方がよい。母親の落着いた物腰が、こどもの恢復に大きな影響を与える水分は、吐かない限り少量づつ、要求に応じて与えておくこと、薄めた果汁なども制限なしに与えてよい。食物は初めは与えない。吐

気がとまつてから、ぼつぼつ与えるが、恢復は急速であるから、食物のすゝめ方もそれに伴つて、あまりゆつくり進めてゆくようなこととはしない方がよい。下剤は与えない。必要があれば洗腸する。

予防の第一は、消極的なことをするなということである。あまり子供の食事などにやかましくしない方がいゝ、心がけることは、むしろ偏食矯正である。ビタミン類では即の不慮がいけないという人もあるが、特に即だけと考える必要はない。適度な戸外運動、充分な睡眠、正しい食生活、そして日光といふ、空気を主眼にした積極策をとり、間接乍ら身体を全体に強くすることが、結局予防の方策になる。あまり細かい干渉がましいことをしてたえず精神的圧迫を加えることはやめて、何時も楽しい家庭、こどもにとつて信頼できる親であるという安心感を与えてやるのが大切であらう。

× × ×